勿凝学問 295

やっぱり、経済学が悪いのではなく経済学者が悪いんだと思う
経済学教育方法考

2010 年 4 月 2 日
慶應義塾大学　商学部
教授　権丈善一

ゼミの 4 期の卒業生で、アバター にそっくりなのがいて、僕は映画を観た後に会ったときに、「**人類の中で最もアバターに似ているの**は、お前だよなぁ」と言って、誉めてあげた。だが、どうも喜んでくれない。先日の卒業生の結婚式の時は、アバター似の彼に僕が同じことを言うと、周りにいた彼の同期の学生たちは、「超ヒット映画の主演男優に似ているって言われるなんて、うらやましい！」と言ってくれるのだが、なぜだか、当人は、いまひとつ(@_@)。

ところで、経済学の中には、ホモエコノミカス＝合理的経済人というのが登場する。僕は昔から、彼（ひょっとして彼女？）のことを、エコノ君と呼んでいて、10 年ほど前にゼミの第 1 期の学生が、次のマスコットを作ってくれていた。

このエコノ君、ちょっと現実離れした性格の持ち主で、人間ってのは損得のみにもとづいて行動するし，他の人たちも利己的な動機だけで動くと信じきっている。まぁ、あまり友だちになりたくないような奴で、普通は、まわりにこういうのってのはいない。でも、僕は昔から、「**人類の中で最もエコノ君に似ているのは**、エコノミストなんだよなぁ」と言っていたわけで、経済学を勉強したらしい＜エコノミスト＞ってのは、不思議とこのエコノ君に似ているという感想を持っている。

そうした中、同じことを言っている人物がいたので紹介したくなったわけである。

スティグリッツ『フリーフォール』349 頁

わたしたちのほとんどは、自分が、有力な経済モデルの根底をなす人間観、つまり打算的で、合理的で、自己利益を追求する、利己的な個人という人間観に従って行動すると考えることを好まない。この人間観には、人に対する共感や公共心、利他主義などの入り込む余地がない。**経済学で興味深いのは、経済学のモデルの描写がほかならぬエコノミスト自身にうまくあてはまるという点であり、学生が経済学を学ぶ期間が長ければ長いほど、ますますモデルに似てくるのだ。**

こんな面白いことを言うスティグリッツは、『フリーフォールの』の中で、「経済学を改革せよ」と言っているのだけど、そう言っているスティグリッツ自身が経済学者なのだから、きっと、僕の言う次の言葉の方が正しいのだと思う――つまり、スティグリッツのような経済学者が数多く輩出されて、主流派になるような経済学教育を行う必要があるのではないかということ。

権丈「政策技術学としての経済学を求めて――分配、再分配問題を扱う研究者が見てきた世界」『at プラス』 2009 年 8 月号

なお、最初に断っておきたいことは、経済学以外の世界から眺めれば、経済学というあたかもひとつの考え方があるように見えるかもしれないが、経済学の中には、他の世界と同様に、実はいくつもの流派がある。経済が危機に瀕し国民生活の底が抜けてしまっている今、経済学をひとくくりにしてこれを全否定したくなる反経済学の感情が起こるのは分かる。しかし、昔から、まともな経済学というものは確実にあり、それを論じる人もたしかに存在してきたのである。ただそうした真っ当な流派が主流派たり得なかったということが真相であり、その原因は、今日的な経済学教育や経済学を学ぶ人に問題があるということを分かってもらうのが、本論の主なねらいである。ただし、私が求める経済学教育をおこなうとすれば、人が育つのに時間がかかる。この再生産コストの高低、イニシエーション・コスト（入門コスト、入信コスト）の高低が、いずこの世界でも中長期的には数に影響を与え、主流、反主流の違いを生む根本的な原因となっていくのである。

さてさて、前置きが長かったけど、ここで言う、経済学教育の話――これが今日の本題である。新年度もはじまり、教育方面の仕事でもはじめようかと思って、本日、筆を執った次第。

きわめて的確に経済学教育のあり方をまとめた文章があるので、紹介しておきたい。来

週から、健康マネジメント研究科という大学院の「公共政策・財政学入門」の中で、経済学説史や福澤諭吉の文章をひたすら読ませる僕の講義を、んっ(-_-)？と思う学生が毎年でてくるのだけど、僕としては、それは「公共政策・財政学入門」の中での僕なりに考えた立派な経済学教育法なんだよな。今は、分からないだろうけど、3ヶ月間、ガマンガマン。

スキデルスキー『なにがケインズを復活させたのか？』280－1頁

> マクロ経済学の修士号は経済学だけではなく、他の学問との複数専攻にし、経済学以外の比率を半分にすべきだ。たとえば歴史学、哲学、社会学、政治学、国際関係論、生物学、人類学などとの複数専攻がありうる。経済学以外の分野から経済学研究に寄与する部分を見つけ出すことには利点がある。経済学の教師や学生が哲学や歴史学の教師や学生と議論するよう義務づけられれば、すばらしいことだ。自分の専門分野以外の点にある程度詳しくなれば、もっと素晴らしい。どちらの側も得る点がある。大学院のマクロ経済学教育が幅広い分野にわたるようになれば、ある経済政策が経済の安定性や成長、開発に与える影響だけでなく、社会や道徳に与える影響も研究するようになるだろう。

まっとくもって、スキデルスキーが言うとおりなんだよな。ちなみに、僕の『再分配政策の政治経済学Ⅰ』の帯には、次のような文章がある。

> 権丈(2005〔初版 2001〕)『再分配政策の政治経済学Ⅰ――日本の社会保障と医療』
>
> 多くのひとは、わたくしが社会保障を考えると言いながら、なにゆえに、ほぼすべての章にわたって＜権力の話＞を登場させるのかと、奇妙に受け止められるかもしれない。また、ヴェブレン、ミュルダール、ガルブレイスの考え方が分析の基礎になっていることや、マキャベリの話などが出てくることとのつながりを疑われるかもしれない。しかし、わたくしにとっては、これらはすべて、十分に、社会保障論なのである。〔序章より〕

今日の本題はここまでだけど、この文章に続けて、スキデルスキーは、次のように語る。

> このような再構築の明らかな目的は、マクロ経済学をミクロ経済学の方法や思考習慣の浸食から守ることにある。このような拡大と拡散によってのみ、数学主導型の経済学への集中を緩和し、数学的な能力だけでなく、哲学や政治を理解する能力も持つ点に社会にとっての主要な価値がある、経済専門家に適切な教育を行うことができる。こうした再構築で、経済学はニュートン型の見方を弱め、研究課題が回帰分析型ではなくなるだろう。

　このような動きが急速に起こるとは予想しない。経済学は現状では、啓蒙主義思想の明確な表現という性格が深く根付いているからだ。しかし、経済力と思想の中心がアメリカとヨーロッパからアジアと中南米に移るとともに、徐々に実現する可能性がある。そうなれば、シカゴ大学、ハーバード大学、マサチューセッツ工科大学などの偉大な経済学部の権威が衰えはじめ、もっと謙虚な経済学が成長することになろう。

ところで、スキデルスキーのミクロ経済学観は？

　大学院でミクロ経済学の研究をマクロ経済学研究から分離することである。大学院のミクロ経済学コースでは現在と同様に、狭い範囲の想定に基づくモデルの構築と検証を行うべきだ。こうしたコースはビジネス・スクールで教えるのがおそらく最善であり、そうすれば幅広い経営学研究と組み合わせることができる。

まぁ、似たような理念に基づいているのが慶應の商学部なんだけど、いまや、教員を含めて、何人が分かっているのやらやらやら。。。

付録　健康マネジメント研究科が登場する文章

勿凝学問 34　尋ねられたから答えた世界一初歩的な文章指南

勿凝学問 94　NHK があるんだから国営政党もあっていいんじゃないかな（笑）——2007 年参院選公示日の健康マネジメント研究科最終講義

勿凝学問 96　医療の生産性向上は国を挙げての課題！？——診療報酬を引き上げれば医療生産性は上がるよ

勿凝学問 134　社会保険方式論者ねぇ、まぁ、悪くはないけど違和感はあるね——プロとアマチュアの見解の相違としての基礎年金財源方式と混合診療問題

勿凝学問 161　この国の民主主義が一歩前進か——前原民主党前代表の民主党マニフェスト批判